

○ 病虫害防除法（イチゴ）

（ア）萎黄病 *Fusarium oxysporum*

（防除のねらい）

育苗ほで6月上旬頃から発病し、8月に病徴が顕著になる。発病初期は新葉が黄緑色になり、小葉が小さく、船型に巻いて奇形となる。その後、萎黄症状が激しくなり、株全体が枯死する。本病はランナーの栄養繁殖による伝染が主である。

（耕種的・物理的防除法）

- （1）発病株は周りの土壌とともに除去する。
- （2）親株は一斉に更新し、無病親株から採苗する。
- （3）収穫後の残さはできるだけ取り除いて、残根の分解促進に努め、土壌消毒を徹底する。
- （4）上記親株更新と土壌消毒は一方だけ行っても効果がないので必ず両方行う。

（イ）うどんこ病 *Podosphaera aphanis*

（防除のねらい）

病原菌は親株を通じて苗に伝染し、イチゴだけで世代を繰り返す。乾燥及び多湿のいずれでも発生する。生育の衰えたものほど多発しやすい。定植前の育苗期防除を徹底し、本ばに病原を持ち込まない。

（耕種的・物理的防除法）

- （1）無病苗を植える。
- （2）発病した果実、葉などは取り除き持ち出す。
- （3）通風をよくする。

（化学的防除法の注意事項）

水和剤には展着剤を加用する。

（ウ）疫病 *Phytophthora nicotianae*

（防除のねらい）

生育温度は30℃前後が適温で、夏季高温時の8～9月に多く発生する。病原菌はクラウン部から根や葉柄基部にまで侵入し発病する。このため、苗床において急激な萎ちょう、立枯れをおこし、欠株となることがある。

（耕種的・物理的防除法）

- （1）無病親株から採苗する。
- （2）雨よけ育苗を行う。
- （3）雨水等により伝染するので、苗床に水が溜まらないように排水対策をとる。
- （4）土壌消毒剤や太陽熱による土壌消毒を行なう。
- （5）発病株は周りの土壌とともに除去する。

（エ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

（防除のねらい） キュウリの項参照

（耕種的・物理的防除法） キュウリの項参照

(オ) 炭疽病 *Colletotrichum acutatum*

(防除のねらい)

葉、ランナー等の地上部の各部位と、クラウン部を侵す。発生を防止するには無病親株から苗をとることが基本で、親株、採苗時、育苗時をとおして雨よけや定期的な薬剤防除など総合的な防除を実施する。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 無病親株から採苗する。
- (2) 親株から育苗ほまで雨よけ栽培を行う。
- (3) 雨水やかん水時の土砂の跳ね返りを防ぐために、ベンチ育苗を行う。
- (4) 降雨中の摘葉作業は控える。
- (5) 萎凋、枯死した株は、直ちに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

(化学的防除法の注意事項)

- (1) 新葉展開開始期から定期的な薬剤散布を開始する。
- (2) 薬剤散布は概ね 10 日間隔で行い、発病がみられた場合は散布間隔を短縮する。
- (3) 薬剤は株元まで届くように丁寧に散布する。
- (4) 土壌消毒剤で消毒する場合は、残さがよく分解してから行う。この時、クラウン等の収穫残さはできるだけ取り除いておく。

(カ) 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

(防除のねらい)

枯死葉、老化葉、枯死花卉が最初の発生部分となり、伝染する。気温が 20℃前後の時に発生は多い。ハウス内が過湿状態にならないようにし、薬剤散布は下葉かき後の葉数の少なくなった時期に行うと効果的である。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 病果、病葉は早目に摘除しハウス外に持ち出し、混み合った下葉は除去する。
- (2) 排水並びに通風をよくする。
- (3) マルチ栽培をする。

(キ) 芽枯病 *Rhizoctonia solani*

(防除のねらい)

病原菌は土中で生存し、土壌伝染するとともに、ランナーを通じて苗に感染し、苗伝染することも多い。防除は薬剤散布だけでなく、肥培管理を適切に行う必要がある。22℃以上の高温、特に、25～30℃で激しく発病する。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 発病地から親株はとらない。
- (2) 被害株は焼却する。
- (3) 排水を図り、下葉の除去を行い通風をよくする。

(化学的防除法の注意事項)

発蕾期に芽の部分を中心に散布する。

(ク) 輪斑病 *Dendrophoma obscurans*

(防除のねらい)

病原菌は被害部で越冬し、梅雨期～10月ごろにかけて葉、葉柄、ランナーに発生する。採苗床から薬剤散布による防除を行わなければならないが、枯死葉や病葉の除去などのほ場管理も必要である。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 無病株から採苗する。
- (2) 被害葉は早目に摘み取り処分する。
- (3) 下葉を取り除き通風を図る。

(ケ) 青枯病 *Ralstonia solanacearum*

(防除のねらい)

ランナーの養成期の被害が問題となる。病原細菌はイチゴの他、トマト等多くの作物を加害する。水の停滞する場所や排水不良のは場に発生しやすい。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 床土は健全土壌を用いる。
- (2) 発病ほ場は5年以上輪作する。
- (3) 排水をよくする。

(コ) チャノキイロアザミウマ

(防除のねらい)

施設では3月以降急激に増加するので注意する。新芽、新葉、幼果を好み、花には寄生しない。防除は開花期までに徹底し、春先のハウス換気に伴う侵入を警戒する。

(耕種的・物理的防除法)

ヒラズハナアザミウマの項参照

(サ) ヒラズハナアザミウマ

(防除のねらい)

施設では3月以降急激に増加するので注意する。花に寄生し、花床を食害するため、不稔になったり、果実が肥大しても果皮が茶褐色になる。

花や果実に被害が出てからは手遅れなので、春先のハウス換気に伴う侵入を警戒し、早期発見に努める。

(耕種的・物理的防除法)

- (1)ハウスの開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
- (2)栽培終了後は残さをただちに処分し、周囲への分散を防止する。
- (3)ハウス周辺の雑草は増殖源となるので環境整備に努める。

(ス) アブラムシ類

(防除のねらい)

露地・ハウスを通じて周年発生する。アブラムシ類が寄生している苗をハウスに持ち込むと多発することがあるので、定植前までに十分防除を行う。ワタアブラムシはウイルス病を媒介するのでウイルスフリー株では特に防除を徹底する必要がある。

(セ) オオタバコガ

(防除のねらい) トマトの項参照

(耕種的・物理的防除法) トマトの項参照

(ソ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

ハスモンヨトウの老齢幼虫は、薬剤が効きにくいので、防除は若齢期に重点を置く。サトイモ、大豆等では比較的早くから発生を認めるので、これらの作物の発生を参考とする。

(タ) コガネムシ類

(防除のねらい)

越冬後の幼虫は本ぼ又は親株を加害し、仮植床又は本ぼ定植時には第一世代幼虫が主体に加害する。仮植期、早植の定植初期に幼虫加害が目立つので、仮植床植付時又は本ぼ定植時に薬剤を土壌施用する。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 仮植、定植前に約1か月間冠水すると非常に有効である。
- (2) 未熟堆肥、野積み堆肥は使用しない。

(チ) ハダニ類

(防除のねらい)

本ぼでの発生は苗からの持ち込みによることが多いので、苗床からの防除を十分に行う。下葉での発生が多いので薬剤は散布むらがないよう丁寧に行い、抵抗性の発達を防ぐために同一薬剤の連用は避ける。密度が増加してからの防除は困難なので初期防除に努める。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 下葉かきを定期的に行う。
- (2) ほ場周辺の雑草は除去する。

(化学的防除法の注意事項)

- (1) 薬剤は下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) ほ場によって薬剤感受性が異なるので、散布後は必ず防除効果を確認する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(ツ) ネグサレセンチュウ類

(防除のねらい)

根ぐされ萎凋症発生要因の1つにセンチュウの寄生がある。疑いのあるほ場は土壤消毒を行う。

(テ) イチゴメセンチュウ

(防除のねらい)

主としてランナーによって親株から子苗に移動するが、雨水でも移動する。土壌中のものは茎葉を伝って寄生する。健全苗の使用がまず大切である。被害株の早期発見に努め薬剤散布する。